



Sci-Fi Prototype

観光 渡辺浩式

観光

2030年。すでに……

遠隔ワークが一般化し、長距離通勤は過去の遺物となった。

テレイグジスタンス技術の進歩によって、

本人が現場に居合わせている状況と遜色のない

作業効率が実現していた。

例えば医療の現場では熟練医師による遠隔診断、

さらには遠隔手術も日夜行われていた。

この効果は都市の拡散に貢献した。

過密・過疎の問題は次第に解決しつつあった。

眼前にそびえ立つ山、山、山。それらはあまりにも巨大で、見上げているとやがて仰向けに倒れてしまいそうになる。

凍りついた山稜は刃物のように鋭利で、青空をジグザグに切り裂いている。山肌は垂直な壁面のように見える。山麓までは垂直に、そしてそこからこの足元へと、荒涼とした岩と石、あるいは雪と氷の平地が続いている。ところどころに、焼け焦げたような色合いの、植物の残骸らしきものも見える。

どこにも、生命のぬくもりはない。それなのにこの風景は見飽きることはない。死の惑星の風景から、なぜか果てしないエネルギーが沸き立っているように感じられるのだ。

この場所は、世界最高峰エベレストの麓にあるベースキャンプの1つだ。

僕は世界の屋根と呼ばれるヒマラヤ山脈を眼前に臨んでいる。

……

しゅうしゅうと空気の音を聞いた。その方向を見ると、僕が腰掛けている岩場からすぐ近く、大きな花崗岩の割れ目から、風船が膨らみ始めていた。

それはうねうねと変形しながら大きくなっていった。やがて細長い胴体から頭と手足が生えてきた。指が一本一本伸び、顔の部分には目鼻が浮き立ってきた。

観光

それが最終的には一体の人間となった。小太りの中年男性だ。風船の形はそれほど精密なものではないが、内側から投射されている映像で、リアルな人間に見えるのだ。

風船の男性は、動くことができた。

きょろきょろとあたりを見回した。そして遠景の山並みに気づくと「おお」と感嘆の声を上げた。

僕は近くに歩み寄っていたが、素晴らしい光景に見とれている彼をしばらく邪魔しないように気をつけていた。やがて彼が気づき、こちらを見て会釈した。

「ワンダフルビュー」

「ええ、本当に」。彼は目を細めて僕のことを見た。

「おお、日本の方なのですか」

「ええ。わざわざこんなところまで来て日本人に会うなんて、興ざめさせてしまったかもしれませんね。すみません。ここが風船ポイントだと気づかなくて、しかも現れたのが日本人のようだったので、懐かしくてつい近づいてしまいました」

「興ざめなんかではありません。人間に、しかも日本の方に会えて、私はとても運が良かった。私はこの場所から半径1メートル程度しか動き回れませんからね。バーチャルの、これが限界です」

「存じ上げています。ただね、その場所が眺望にはベストポジションであることは間違いないですよ」

この人は自分の部屋から、VRスーツとゴーグルを装着して、ここに来ているのだ。

風船とは、正しくは「バーチャルバルーン」というものだ。世界中の観光スポットや、さらには普通の人はなかなか行けないような秘境にも設置されている。

観光

ネット経由でアクセスできるライブカメラが進化したものだ。その場所の風景を見ることができるだけでなく、その場所に自分自身の体を出現させて、歩き回ったり、そこにあるものに触れたり、そこにいる人と会話したりもできる。

そのために、風船がある。アクセスした人間の形状に膨らむ。超小型アクチュエーターを内蔵し、電力と空気圧の変化で、本人が動いたとおりに動くことができる。遠隔操作ロボットである。

風船は見晴らしの良い、ただし邪魔にならない場所に設置されている。風船が膨らんでその姿が現れるまではその存在に気づく人はあまりいない。

「本当にその場におられる、本物の登山家さんにお会いできるなんてうれしいです。ぜひお話を聞かせてください」

「僕は登山家ではなくて、ただのバックパッカーなんです。ここより上には行かないんです。ほら、向こうの方にテント村が見えるでしょう。ここからエベレストの山頂に向かう人達は、あそこにいます」

「立派な登山家ですよ。知っていますよ、ここまで来るだけでもとんでもなく大変なのでしょう？」

「ええ、まあ……」

僕はそれから時間をかけて、この人に、リアルの旅をしてこの場所にたどり着くまでの経験を話した。

……

まず飛行機を乗り継いで、最後は小さなプロペラ機に乗って最寄りの小さな空港に着く。最寄りといっても、そこからここまで、距離にして50キロを歩く。標高差は富士山一個分以上。トレッキングで4日はかかる。

その行程は、ごつごつした岩場や急な坂がほとんどだ。薄くなっていく空気を必死で吸いながら、へとへとにな

観光

りながら、歩き続ける。踏み外したら死を免れない長い吊橋も渡る。

しかし、時折、高山植物の、見たこともない可憐な花を見かける。途中の村はどこも素朴で、寺院は美しい。フレンドリーな村人たちの文化と生活に触れることもできる。

相手は感心しながら頷いていたが、ふと僕は余計な話をしてしまっているかもと思った。

「あ、もしかしたらこういう話は釈迦に説法でしたか」

「いいえ。ありがたいですよ。実際に、大変な思いをされている人の話は、やはり重みが違います」

その言葉にはちっとも嫌味はなかったが、それで、彼がここまでの途中の風景もすでにVRで体験していることがわかった。

「あなたのような方は、われわれひきこもり旅行者のことはお嫌いかもしれません」

「いえ、そんなことは」

男性は人懐っこい笑顔で話し続けた。

「でもね、言わせてください。これはこれで、とても楽しいんですよ。私の趣味はこのバーチャル旅行です。実際に旅行をしたことは一度もないんです。最初はとても若い頃でね、暇もないし、金もないからどこにもいけない、だからとりあえずその代わりというか、予行練習のつもりでやってみたんですよ。ところが体験してみたら、満足してしまったんですね。こんなふうには、風船の体で世界のいろいろな場所に行く。これが無性に楽しいんです。今は年をとって時間にもお金にも余裕ができましたけど、外に出て、現地まで行く気はすっかり、なくなりました。実のところこれだって結構な料金がかかりますし、人気の観光地に行こうと思ったら順番待ちで時間を無駄にすることもある。それでも、こっちのほうが楽しいと思えるんです」

「ええ。わかりますよ」

「旅行の代用としてこれをやってるのではないんです。求めるものはこれですべて満たされているんですよ」

観光

彼はその場でふわふわと動いてみせた。

「ほら、こんなふうに体ごと、ここに実際にいるような感覚になっています。バーチャルのインターフェイスは最近とても進化しています。この場所の空気の匂いまで再現してくれるんですよ」

「ほう」。それは知らなかった。

「ただね、実際はその場所は空気が薄いんでしょう。そこは違うでしょうね」

確かにそうだ。ここの酸素濃度は下界の2分の1しかない。

「私のように体が弱いと、実際にそこにいったらすぐに倒れるでしょうね。バーチャル旅行では、そういう過酷な環境については再現しません。砂漠の暑さとか、氷山の寒さとかもね。そこにある食べ物も、もちろん食べられませんけどね、食べたければネットで注文すれば同じようなものを、もっと清潔で安全な状態でデリバリーしてもらえます。不衛生なものを食べてお腹をこわすなんてことも、ありません」

「確かにね」

「つまりですね、私が体験しているのは、つらいこと、危ないことをすっかり取り除いて、楽しいことだけを残した、旅なんです」

「なるほど……けど、そういう意味では、僕もそんなに変わらないかもしれません。この場所まで来て、ここから山々の頂上までを見渡して、そしてテントの、本気の登山者を見送って、それで、満足している。ある意味、疑似体験しているんですよ、世界最高峰の登頂を」

すでに海拔5千メートルを超えているものの、巨大な山々のここは麓に過ぎないのだ。ここからさらに上を攻める人たちが、体を慣らすために過ごす場所である。ここから頂上までのアタックは、また別次元のことになるのだ。

観光

「けれども、あなたは行けるでしょう？ 確か、エベレストの頂上にも風船は設置されていたはずですよ」

「いや、あそこには行きません。さすがにあの場所に行くには、とんでもない料金がかかるんです。1分間で、車1台分くらいですかね。それでも半年待ちだそうです。それを体験した人の書き込みを見かけたことがあるんですけど、見ることはできたのはただ1分間、真っ白なだけの世界だったそうです。ははは」

「それでも格安なんですけどね。実際に行こうと思ったら、マンション買うくらいのお金がかかりますよ。僕が断念したのはそのせいもあります。そして、実際に行ったとしても、得られるものはやっぱり真っ白な風景だけです。失うものはお金だけじゃなくて、たとえば凍傷で指の数本を失うくらいは普通のことです。命を失う可能性だって1%以上、あるんです。ああ、僕もわからなくなってきましたよ。実際に外に出て、旅をして、何が楽しいんだろうって」

僕は自嘲した。相手は僕を励ますように言った。

「いや、それでも絶対あるはずですよ。そこに行った人しかわからないことがね」

.....

彼がログアウトして、風船はゆっくりとしぼんでいった。僕はまた岩の上に座った。しばらくぼんやりしていると、ゆっくりと、あたりが暗くなっていった。

投影された映像が消えいったん真っ暗になってから、ぱっと白いだけの照明が点灯した。殺風景なドーム状の内壁が露わになった。

腕時計を確認していると、「おつかれさま」。スピーカーから声がした。

「ずいぶんがんばってくれたね。あんなに殺風景な場所、普通なら1分で飽きたところを、今の人は30分もいてくれた。結構な額を課金してってくれたよ。君のおかげでね」

観光

「ああ……」

バーチャル観光は、時間当たりで課金している。退屈してすぐにログアウトされたら、ちっとも儲からない、だから僕のような人間が雇われて、偶然のふりをして話しかけて、長引かせるわけだ。

「どうした、疲れたか」

「いや……」。僕は答えた。

「時々、申し訳なくなるんだ。あんなにいい人のことを、二重の意味で騙すなんて」

「二重とは？」

「僕が偽物の旅行者だということだけでなく、彼らがアクセスしてくるこの空間が、そもそも偽物だってことだ」

「それはまあ、仕方ないだろう。世界中にこんな風船を設置して、ずっと維持しておくなんて、費用がかかって仕方ない。そんなことをして採算が合うわけがないだろう」

僕は頷いた。そしてため息をついた。

「じゃあ、次の仕事だ。さっきの場所から1万5,000キロ離れた場所だ」

壁面スクリーンがだんだんと赤みを帯びてきた。大空と、大海原が、朝日に染まっているのだ。足元は、丸太を組んだバルコニーだった。僕は水上のコテージにいた。

「今度はタヒチだよ。急いで着替えて。それから、日焼けしていないと不自然だ。メイクも頼む」

僕はあたふたとロッカールームに走った。声はのんきに言った。

観光

「いやあ、きれいな朝焼けだな。もう1つ、教えてあげよう。こんな風景はな、もう世界のどこにもないんだよ」

了

〔解説〕 巨大な手のひらの上で踊らされ続ける人間

2030年、テレワークは一般化した。HMDを活用し、仮想空間に一堂に会し会議することも当たり前のように行われている。さらに、遠隔ロボットなどのトレイグジスタンス技術が発展すると、Face to Faceの関係性は、トレイグジスタンスと人のコミュニケーションに変化していく。

本作に描かれている観光シーンに限らず、働く場も同様であろう。労働人口の減少によりスキルがデジタル化し、複数の遠隔ロボットを同時に動かし、作業をする人々も出てくるだろう。

その際、風船型の遠隔ロボットを動かす行為には、自己所有感や行為主体感といった自分が行っていることに対し主体性を感じる感覚のほかに、リスクヘッジとしてその人格が本人に紐付いているという新しい個人認証の仕組みが求められる。つまり、トレイグジスタンスを本人としていかに認識できるのか、セキュリティの新たな仕組みとプライバシーの担保が求められるのではないだろうか。

「NEXT UI FUTURE SCENARIO」より

株式会社日立製作所 研究開発グループ 社会イノベーション協創センタ

シナリオライティング：渡辺浩式